ヨハネの福音書（55）
「有罪判決」
ヨハ 19：1～16

1. 文脈の確認
   (4) イエスの受難（18～20 章）
      ①イエスの逮捕（18：1～11）
      ②イエスの宗教裁判（18：12～27）
      ③イエスの政治裁判（18：28～40）
      ④有罪判決（19：1～16）

2. 注目すべき点
   (1) 皮肉的にイエスが「ユダヤ人の王」であることが描かれる。
   (2) ピラトの「見よ、この人だ」の意味に注目する。
   (3) ユダヤ人は訴因を宗教的なものに変更する。
   (4) ピラトの恐れの意味とその結果に注目する。

人の悪意の中で神の計画は進む。
3 つの悪意を取り上げる。
Ⅰ．不正な裁きを行うピラト（1～6 節）
1. 1～3 節

Joh 19:1　それでピラトは、イエスを捕らえてむちで打った。
Joh 19:2　兵士たちは、茨で冠を編んでイエスの頭にかぶらせ、紫色の衣を着せた。
Joh 19:3　彼らはイエスに近寄り、「ユダヤ人の王様、万歳」と言って、顔を平手でたたいた。

(1) 革ひもに金属や骨片を埋め込んだ鞭で打った。
   ①鞭打ちは、背中を裂き、時に内臓まで損傷させる残酷な刑罰。
   ②多くの者がこの鞭打ちで命を落とした。

(2) ここでの鞭打ちは、イエスを釈放しようとするための策略である。
   ①ピラトは、血を見れば群衆は満足するだろうと考えた。
   ②通常は、刑場に着いてから鞭打ちを行う。
   ③イエスは 2 度の鞭打ちを受けた。1 度目の鞭打ちは軽めであった。

(3) 兵士たちも、イエスを嘲った。
   ①いばらの冠を頭にかぶらせた。

②紫色の衣を着せた。

＊紫はローマ世界で王や高官を象徴する色。

③顔を平手で打った。

＊「万歳（カイレ）」は皇帝に献げる敬礼のことば。

＊平手で打つのは、侮辱を与えるための行為。

＊イザヤ書 53 章「彼は侮辱され、ののしられても口を開かなかった」

(4) ヨハネの神学

①人間の意図は、イエスに対する侮辱であった。

②しかし、イエスがユダヤ人の王であることが逆説的に浮かび上がる。

③アダムは楽園に茨による呪いをもたらした（創 3：18）。

④最後のアダムは、茨を冠としてかぶることにより、人類の呪いを身に負った。

2. 4〜5 節

Joh 19:4　ピラトは、再び外に出て来て彼らに言った。「さあ、あの人をおまえたちのところに連れて来る。そうすれば、私にはあの人に何の罪も見出せないことが、おまえたちに分かるだろう。」

Joh 19:5　イエスは、茨の冠と紫色の衣を着けて、出て来られた。ピラトは彼らに言った。「見よ、この人だ。」

(1) ピラトは、再度イエスをユダヤ人たちの前に連れてきた。

①無罪宣言を行うためであった。

②無残な姿を見せ、「これで十分ではないか」と訴えようとした。

③「見よ、この人だ」

＊「Ἰδοὺ ὁ ἄνθρωπος」、「エッケ・ホモ」（ラテン語）

(2) ヨハネの神学

①イエスを最後のアダムとして提示している。

②イエスを人間の弱さと苦しみを担う「人類の代表」として提示している。

③イエスを見ることは、神の裁きを受ける自分の姿を見ることである。

④神の計画は着実に進められている。

3. 6 節

Joh 19:6　祭司長たちと下役たちはイエスを見ると、「十字架につけろ。十字架につけろ」と叫んだ。ピラトは彼らに言った。「おまえたちがこの人を引き取り、十字架につけよ。私にはこの人に罪を見出せない。」

(1) 血に飢えたユダヤ人たちを静める方法はなかった。
①彼らは、「十字架につけろ」と激しく叫んだ。
②2 度くり返されているのは、憎悪の激しさを示している。

(2) ピラトは、投げやりな拒絶のことばをくり返した。
①ピラトの「無罪宣言」は、これが 3 度目である（18：38、19：4、6）。
②ローマ法的にはイエスは完全に無罪であることが強調されている。
③「おまえたちが……十字架につけよ」は皮肉である。
④ユダヤ人たちは十字架刑にこだわった。
⑤詩 22 篇、ゼカ 12：10 によると、メシアは「刺し貫かれる」必要があった。

II．神の子を拒否する宗教指導者（7〜11 節）

1．7 節

Joh 19:7　ユダヤ人たちは彼に答えた。「私たちには律法があります。その律法によれば、この人は死に当たります。自分を神の子としたのですから。」

(1) ユダヤ人たちは、ローマ法で無罪でも、律法では死罪に値すると述べた。
①「この人は自分を神の子とした」
＊神と等しい者とした。冒とく罪（レビ 24：16）に相当する。
②ヨハネの福音書全体のクライマックスの提示である。

(2) 神学的告発（冒涜）を政治的処刑（十字架）につなげるという不自然な構造。
①不自然な構造を通して神の計画が前進する。

2．8 節

Joh 19:8　ピラトは、このことばを聞くと、ますます恐れを覚えた。

(1)「神の子」ということばが、ピラトに大きな衝撃を与えた。
①ローマ人にとって「神の子」（divi filius）は耳慣れた表現だった。
②皇帝崇拝において、皇帝は「神の子」と称される。
③ギリシア・ローマ神話では、人間と神の間に生まれた英雄を「神の子」と呼ぶ。
④ピラトは、宗教的論争ではなく、超自然的存在を侮辱している可能性に直面。
⑤イエスが持っている静かな威厳が、ピラトに良心の呵責を与え始めた。

(2) 恐れの二重性
①政治的恐れ（暴動、カエサルへの報告）
②宗教的恐れ

(3) ヨハネの神学における逆説

①イエスを拒絶する群衆と、イエスに畏怖を抱く異邦人総督

②イエスは、世界にとって畏怖すべき存在である。

(4) 新しい訴因が出て来たので、裁判のやり直しが始まる。

①ここで、ピラトは再度官邸に入る。

3. 9〜11 節

Joh 19:9　そして、再び総督官邸に入り、イエスに「あなたはどこから来たのか」と言った。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。

Joh 19:10　そこで、ピラトはイエスに言った。「私に話さないのか。私にはあなたを釈放する権威があり、十字架につける権威もあることを、知らないのか。」

Joh 19:11　イエスは答えられた。「上から与えられていなければ、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに引き渡した者に、もっと大きな罪があるのです。」

(1) ピラトは、イエスの出身地を聞いた。

①彼は、イエスがガリラヤ出身であることを知っていた。

②ピラトには、イエスに対する恐れが芽生えていた。

(2) イエスは沈黙された。

①イザ 53：7 の成就

＊イエスは、神の計画に従っておられた。

②ピラトは、イエスが自分を弁護しないので不思議に思った。

③ピラトは、自分にはイエスを救う力があると告げた。

＊状況をコントロールできていない苛立ちが見える。

(3) イエスは 2 つのことを告げた（自己弁護ではない）。

①ピラトの権威は、限定的に神から委託されたものである。

②ピラトよりも、イエスを十字架に付けるために渡した者たちの罪の方が重い。

＊大祭司カヤパの罪、ユダヤ人の指導者たちの罪

＊ピラトにも罪はある。使 3 章のペテロのメッセージ。

＊使徒信条の中にピラトの名が出てくる。

Ⅲ. 世の王を選ぶ人々（12〜16 節）

1. 12 節

Joh 19:12　ピラトはイエスを釈放しようと努力したが、ユダヤ人たちは激しく叫んだ。「この人を釈放するのなら、あなたはカエサルの友ではありません。自分を王とする者はみな、カエサルに背いています。」

(1) ピラトはイエスを釈放しよと努力した。

①イエスの罪を見出すことができない。

(2) 宗教的告発（神の子）から、政治的告発（反カエサル罪）への転換が起こる。

①自分を王とする者はカエサルに背く者である。

②もしイエスを釈放するなら、カエサルに背く行為に加担したことになる。

③そうなれば、あなたは「カエサルの友」ではなくなる。

＊ローマ皇帝の忠実な支持者に与えられる公式称号

④当時の皇帝は、ティベリウスである。

＊病気になっており、猜疑心が強く、残酷な状態にあった。

＊ピラトは、ユダヤ人たちが皇帝に直訴するのを恐れた。

(3) ヨハネの神学

①群衆は「カエサルこそ王だ」と告白し、メシアを拒絶。

②「真の王イエス」が拒まれることで救いの道が開かれる逆説を強調。

2. 13～14 節

Joh 19:13　ピラトは、これらのことばを聞いて、イエスを外に連れ出し、敷石、ヘブル語でガバタと呼ばれる場所で、裁判の席に着いた。

Joh 19:14　その日は過越の備え日で、時はおよそ第六の時であった。ピラトはユダヤ人たちに言った。「見よ、おまえたちの王だ。」

(1) 官邸の中庭の「敷石」と呼ばれる場所で判決が下される。

①この日は、7 日間の種なしパンの祭りの備え日であた。

②第六の時とは、午前 6 時である。

③ヨハネは意図的に過越の羊とイエスを重ねて描いた。

(2) ピラトは、「見よ、おまえたちの王だ」と皮肉を言った。

①ヨハネの神学的視点からは、真理を告げる証言となっている。

②逆説的に、ローマ総督自身がイエスの王権を公に宣言することになった。

3. 15～16 節

Joh 19:15　彼らは叫んだ。「除け、除け、十字架につけろ。」ピラトは言った。「おまえたちの王を私が十字架につけるのか。」祭司長たちは答えた。「カエサルのほかには、私たちに王はありません。」
Joh 19:16　ピラトは、イエスを十字架につけるため彼らに引き渡した。／彼らはイエスを引き取った。

(1) ピラトと祭司長たちのやり取り

①「除け、除け、十字架につけろ。」

＊共同体から徹底的に排除せよという意味

②「おまえたちの王を私が十字架につけるのか。」

＊皮肉と苛立ちが混ざっている。

③「カエサルのほかには、私たちに王はありません。」

＊ユダヤ人の王（メシア）を拒否した。

＊イスラエルの真の王は神ご自身（1 サム 12：12、詩 5：2 など）

＊これがイスラエルの公式なメシア拒否の宣言となる。

(2)「ピラトは、イエスを十字架につけるために彼らに引き渡した。」

①背後では、神が「御子をお与えになった」（3：16）の成就として描かれる。

②人間の悪意による「引き渡し」が、神の愛の「お与え」へと転換している。

結論：今日の信者への適用

1. 理不尽な状況の中でも神のご計画を信じる。

(1) 人間の裁きはしばしば不正なものである。

(2) しかしその中で、神の救いの計画は進められていた。

(3) 私たちも不条理に直面するが、神の御手が働いていると信じることができる。

2. 嘲笑の中でこそ真理を証しする。

(1) 茨の冠も紫の衣も、兵士たちは侮辱のために用いた。

(2) 結果的には「イエスは王である」という真理を示すしるしとなった。

(3) 私たちが世から嘲られても、神はその辱めを用いてご栄光を表してくださる。

3. 誰を王とするのかを選び取る。

(1) 祭司長たちは「カエサルのほかに王はない」と宣言した。

(2) これはイスラエルの公式なメシア拒否であった。

(3) 私たちも「この世の権力か、イエスか」という選択を迫られる。

(4)「イエスは王」という告白は、一度限りであると同時に継続すべきものである。